無名棽書

勸醫抄　上

和書門
類 三五〇一四 號
函 二二八 架
冊 六三

内閣文庫
和書
類 三五〇一四 號
冊 三 架
函 二一七

内閣文庫
番號 和 35014
冊數 63（35）
函號 217 38

却
漫録
第一
共六十三

国立公文書館
National Archives of Japan

勸醫抄目録

上巻

醫學第一
藥性第二　附食性
脉診第三
方藥第四
藏府第五
鍼灸第六

下巻

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

疾病第七
外科第八
運氣第九
養性第十
人情第十一

勸醫抄目錄終

鹿門先生勸醫抄上

醫學第一

夫醫の業、何事を務とすと雖ども畢竟人の苦腦する所の疾病を治せんと云何を以て其病を治するかは鍼灸藥を以て鍼を刺灸を用ひて治するなり扨其修行の第一は藥性を熟知すべし是は本草を讀ずんばあるべからず故に晝夜熟讀して暗誦すべし肝要なり然ども其本草も諸說紛々にして初心の人は迷ふ所多し其甚多して迷ふ所より後に至りて面面の見識立時ふるうて自然と分明に成こと

あるとても初學の内ハ無學衆とのれり隨分師家ゟ尋問為し必必
下問ふ恥ことなかるを古人の説あり病ハ敵ゟなるゝ醫者ハ
大將みたるゝ　たゞ將愚將の品有りてかつかなる大將ハ
敵とあかるゝ麾下の士卒もなるゝ故常ふ敗北を為さ
と多し藥と真を代るゝ醫者の上手下手ふ因て利と不利とハ
器量次第ふり藥と愚醫の下手ふしハ働かぬものなり然ども文
盲なる醫とても氣象の豪傑なる者ハ敵対て藥を利せて通ら
見也ハ免角大將ゟる醫者ハ己を磨く為ことふり堅甲利兵ハ
藥方の宜なり是を平日に心懸て時ゟ臨て施さを為なり

一凡醫者ハ方技と云て賤役なれとも人の性命ふ預る職分な
る故其任至極重し是を以て司命とハ云ふる故ふ先自分の言行
謹むべきこと第一なり因茲諸生の時ゟ醫學を專ふ學為し其
後ゟ治術ふ掛るべしなを為ことを為して大夫なる醫者ゟ成
ゟ尤文盲ふても治療ゟ達して起死回生の功を顯す醫しか
ゟあれとも夫ハ皆偶偉ゟて危き所作なり然ども風の悪き學
風を學ひ損ひ為ふるものゟハ一文不通の者の方遙ゟ勝る為
きゟ近年華医ゟるゟて先醫道ハ塗炭ゟかゟ取分し明朝み
ゟりて医學も大成ゟるふに人人自家ゟ云ふるゟ

旁觀少し たとある所にかゝるれども能能吟味する所實
に非ずかゝ皆醫道を見損ひたるかゝるに況吾邦をや總
して和漢ともに學醫に時醫に不善と云談あり是全ふらまぬ
と雖も其醫の先生と稱する者を見るに成程高才博識と自負す
れども治療よりおのれ一向に茂然として些少の輕き風邪も切
に養生すると不能是可疑事なり畢竟學流の悪しき習の不宜
つなるべし學文ばかりを療治の邪魔と成ものゝ如しいかゞ之來
治術を能せんなれば學文なれば益骨幹となりて丈夫に成ると
雖ども必俗諺に從ひ從ふらば不佞志學の比々此所に疑を入心

なれども見るに數年かゝり醫學の節よりかゝりて漸く得ことあ
るに似たれども治術の上よりあるいは未熟なる事甚多し中中其
場へ行くなかなか近年廣治術を施して少合點の行くるように
なりたれども本の場へ至りかゝるなり漸其習の悪と云所
を見付なり故に何ゝ學ぶに一向に不學なるよりも此處によ
くゝ工夫を付ること肝要なり夫醫の大段根本此ところを尋推
さるに人の疾苦病悪以除く業より極まり故に古人も宰相より比せり
其道理を書を讀て病機と方意を知り古人の法度を知
りて病人を診修し病症を知りて又當時其師家の傳授をも受

得て習聞事あり方書ハ古人の療治をそなはるの模範なり
廣古方の書を讀考経驗を集て其方劑の妙所を得て些を施用
ゆゑを專要をもとなりて本草ハ一味一味の藥性を雜素
難ハ一症一症の病機を論ず漢の仲景傷寒金以來全方劑の道
廣まり來て夫々出あるハ世世名醫出來まり皆皆方書を述
作ず至今千年充棟ハ多きものハ書籍なり故ハ後世の書ハ茫
洋　又多岐亡羊の憂あり多ハ博雜ハ精意ハ多ハ紀な
ク沉明朝以來ハ別て依托贋偽の書ハ多くハ無用の籍なり
く出故ハ能能選ひてよ迷ひ陷入なり

凡學大ハ博ハ約ハ是古聖人の教なり然ハ初學の者
漫ハ博覽なハ約ハ不能ハ故ハ先初ハ書
の精粗をえらひて肝要の約を學ハ漸道ハ入ハ
ハ其器量ハ隨て何程ハ博ハ
一生涯の内見聞ハ冒而事のかけぬ書物多くなるなり又書
にして却而大きハ學文の害を成ハ
はなきぬハ勝ハ
凡醫の道を學ハ中中大抵のかをひとハ不成ハ古
人ハ游藝ハ云て藝を習ハ水を游樣ハ

時の様よりかとして功を積ミ成らぬなり一生の精力を不盡ハ其極みいまだ分たずかゝ
醫学と療治とハたとへハ草木の花實あるがごとく且醫學ハ高
尚成その療治ハ甚切近平易なるを以て故に俗に近き業形故
に醫學ハたとへハ山をあるがごとく高く登ハ低くすなわち
古人も云へり萬仞の峰嶽も一歩を起る段まゝ漸漸に絶頂に
いたり盡て後漸漸に下山をなすごとく諸生の者ハ先今日俗に
近き書より入門したとへハ衆方規矩医方口訣の屬と云ことを
可用門回春より先入立て段段に次第に古へ立登るべし

外臺千金金匱傷寒と立の段にて絶頂よりあるべし古人高上の
地位に登り段其古方と云ハ中古あゝ悉経験に非ず経験し
古方ハ悉に就中古人世世用覺ひて古今通貫したる名方を又
又能選べる方書を尊ぶなり宋以上を古方と云ハ元明以
來を新方に屬すゝ古人も世代の變移に從ハ古方を段段
に變じ来て用ひ来たるなり總して何のごとく形漢和
ともに古方今方とも経験の方を數多作るゝ學ひて試用て段
病人を分ち診視して病功を積得ハ専要形勢を論加減
高量すべきことハ其人面面の伎倆よりなることなり然とも古人の

跡を踏て行ふ(ゆ)へ漫ふ自己の臆度を以て仕始むるなと必
ずと有るべからず去れば夫程の名手ふ至りて格別なる
醫者意なりと云て萬端よ心を附て意を刻働きふこと專一なる
師家なれども今人情の趣平易切近なるなれば悉教へ授けらる
るを聞きもかつて聞こと に謬の習ふなれば則ち云ふなる
所世話なる師家も反呻する樣ふもかならぬなり只見習と
云專一なる見樣見まね又其道を指南するも云禪宗ふて一月
を過ぎも指もも去魚を釣るもたとへ多皆此類なれ
ども意を以て謀る深く察識するなる亦禪家の經外別傳不立
文字以心傳心なる云て兎角意の字に氣を附し然も學文
ふいなりて又是ハ習なるて成らぬなる所謂ふ自己の意
なるを取さぶ〳〵と臆斷して役ふ立ぬ所古人も深く戒そ
れ初心なる者蒐角儒書を專素讀して文字ハ能識働出来て
こて醫書を讀ふて所
學文と云ふも樣樣の仕形あり廣き道路なれ多岐の迷ひあり迷
學ハ其中の技藝なれ小道なれも又相應ふ樣樣の往なるて迷
ひ易し故ふ師家の教誨を不受ハ多ハ邪路ふ行なり學文療治と
なれ五ふ難易有先療治ふなれ難きかなるハ昨日まて藥

籠を荷ひて市ちまたに出し隷卽今髮ゝを醫者とかり製藥屋の賈
竪たちまち醫者かりて邊幅を飾りて徘徊す動ハ歷歷老医
の餘ハなる病人等代起る事也けり左すれハ輕易なる業とかし
一ハ皤皤たる老医國手もかりかも紀業なる古人を其難きさを
を論ずる始の取付の時ハ無識頑愚の道心者坊主なれも成易き
ものとかをとられも然ども本の医者と云をとれハ中中に其樣
に容易なる事にあらず其ゝを例に安堵すべハ尤不及評これに
よりて觀之ハ療治ハ入安して成就しかもいとこれハ陰
陽造化を相手かりて生る所作なり治物の故に無學にても治

術を能修ゝれハ學医に敵すべし此所に意を附べ紀の文學
文ハ初ハ其入かゝりて後ハ無用の長物となる形の惡心
得違ひて習のわるき學流に染るを以の外に療治の害ハ有る事
形の學文ハ古今の書籍を見て鑑とすべかり卽今見を照鑑とする
許にて死物なり殊に形のあるものを器にいれる水と成れ酒
も成何にても入る品の揃ひハなれかゝれかゝに學文かり
てハ手術拙き医者あり有かり世人の賤しむる所形の無學ハ
てを治療する医者ハ不德不才のかゝひなく世にて信仰する
通情なり亦各好む所に從ふべ紀なり志ありて學ばんと欲せハ

學ぶ〻學力ある程のことハあき形ら若不才にて學文をも
成ぬるハ打捨て療治をのみ稽古すれども畢竟ハ無學有學
共に對用すると見てハ苦〻見て學ぶもなきばかりにまでも習
の宜き医學ハ治療の節ハ先ずあらんすあるて學ぶべんば
海内の書籍猟すべし此又自分の力量次第なり餘力あらハ
學ぶべきなり此外我邦の医者ハ世禄なるゆへ諸生の者是
非とも好成ぶ不忠の第一なり其上先祖へハ不孝の名を
取ん〻こと義を能能思按すべきなり今時病人を診察するに口上
ばかりにて醫案を云て事すむ形ら元來ハ医案を認て出すべき形ら歴

歴の病気を診視してハ是非医案を書残ハあらんあるべき形ら其医
案わかし文章の心得なるべしハ決して書きなるべきなり又自分
の治験を不析ばあるべきなるべきなり後世より上代の治法
を考ふるハ医案なる外なるべし醫按の元祖ハ史記の扁鵲ハ傳より名
醫扁鵲淳于意ハ医按數篇あり可觀なり後世名医類聚亦水玄珠
等なを數多あり也下なるべきハ薛己医按十六種の内よりあり容
易分るものなり汪石山ハ医案を號する一書あり總て医案を
文章拙ハ見苦しきものなり

本草の学甚届り医家の本根なりて尤務るべき事なれども然るに諸
家本艸多くして汗牛充棟なり（初學の輩亡羊の嘆あり夫故折衷
せざれば其要を知ること難し凡本草多くと云ども今の世よ
用ゆる所明の李東壁が綱目盛に世に行はれ以後古本草の
学廢す可嘆哉綱目一書天下本草の大成を集め然ども餘り廣博
過て雜に破られて疎略なる事多く学者能心を附て可讀
形なれども此言は一等高尚の事なり（初心の輩みだりに口
號は不宜なり却て害ありて出来る形なり然ども其心得ふ
ていまだ邪路に向ひなり凡本草に新古の兩説あり古本草の説

とは只其藥の本功療體なるを論ずる者なり（人参
は補氣當歸は補血と云又何某の疾を治すとなり云てあ
るなり後世新本草の説は升降浮沈引経報使なるとて様様の牽
合附托の事ども蒐入て（人参なども實の人間の
君子なるとして理屈を論じたてゝ本を忘れなり此説は
宋末元張潔古なるとなり起まる畢竟後世宋儒の理学議論より始
まる歟古人治術は初めて左様の沙汰決してなきなり却て害ふ
成なるなり無益なること共なり呉呉藥性の本功なるを讀暗記
なして無用の議論には決して見ぬなれば其本説なるを

見ること欲せば證類本草宣しく凡綱目以前大成の書なり明の初
世挙て是を信用せりさるに綱目一度出て證類廃焉と
して其餘を古説古雅なれども其能事も
なくあるなり別て序例證類本草の如見得いまらぬなれば
綱目の序例に時珍作進して散散博とるべき物少形也とて證類ハ
和板なり序例なり一巻板少行はるなり只只藥性を隨分
熟覧して臆記の第一なり會讀なりして見るも其心得肝要なり
夕作去藥性に冊數の多本草少なるはなれども初
の内に先年近き書なれ覧なり回春の藥性歌東垣藥性賦入門

の本草を可見なり夫なるなれば本草原始本草蒙筌なり
さて本草経疏なる等を可讀なり綱目五十二巻一千七百九十
二種何なれ覧らるものなり療治の用に要藥の切近なること
なれ務て能覚ゆるなれ專なるなり總て本草を見るには必得あ
るなり先修治炮製も本草に論あるに皆皆生の草木を製
する法を述るなり今の醫に藥店なる乾藥なれ求るゆへ直に其製
法を書て相違あるなり其抄略をなるなれ家園なる掘取
又に他所なるも生なれ取るなるは本草の修治の通りにてもし
宜なる唐なる舶来の藥も猶又乾藥なる舶上或に長崎又に京都

大坂堺なとにて多く産て來るゆへ（製法よ意を盡せる所にて）
り日本の中にて諸國にて出す藥皆都會を經て藥肆へ
なかれ半分は藥店にて製したる同前なり御苑にて被下之品
味は生乾の品多く夫故手前にて度度日に乾手入して可貯置
なり總して藥時時晴天に風乾なるを宜しとす香氣の品は格
別其外は度度乾なるべし
本草家は一種物産の学なり是又醫たるものの不可不知の事なり
ゆへ餘力あらば心掛て学ぶべし其子細は治術に專なるゆへ
中中暇なるべきこと能く平生山野川澤に游歴年久しく深

山幽谷を尋て吟味を不為は其道に疎きなり故に
陳嘉謨が所謂兩眼昏眼又無眼の譏を論ずるなり此
道に偏に倚りて治術に害なる事あり見識の狂なる古昔
我邦にも採藥使を立て役人なるを藥草は吟味をもなせり今
は其ことを廢して藥掘と藥店に任せ唐にては貢藥として
諸國より天子へ獻上するなり役人を遣して吟味もなすなり今
舶来藥は論商人の賣物なれば心任のなす所なり（はなはだ
能持渡らざる事甚なり）古昔は遣唐使として唐へ学文に学者を差
越して邑邑の事共に博学して歸朝せしなり（藥種なども直

と見て貴ぶべき取来て植かへさせる故に今にいたるまで生生不止事かのごとくなれども我邦の自然と土地の相應して生ずる藥種もなる故少や川芎黄連水晶のごとき和の産を唐ものと用ひあるいは見かけの形唐ものにも勝れる品を貴ぶことあり本草を見るに唐土にても土地代りて變異して出産の品味も甚かるべきを見へたり　日本にても其如くなるべし延喜式和名抄康頼和名抄などに藥の出産國國のさまざまなる今其國にいにしへ他國より出るを見れば此邦の出産も代々に變ずと見へたり唐にても乾藥を市買する任せ

ぶべきなり人情物態同事なり家園に種種様様の品を植かへ古渡の品藥を見ることを居るべきことなり

食性の一事是又醫家の務て熟記すべきなり然るに唐土日本風土甚異なるは其飲食嗜欲も相違せり夫故萬物品味和の品を以て漢方に充るべ間間相違あり儀出来れり漢の食物の書を直に和に充て用ひるべ卒多くは成りがたく能能折衷すべき形なり和人其國の産する和物を食べ用ひるべ其人の性にあるべ其所所の産に因て嗜好甚違ひあり故に今病家に禁

好物書ハ點ヲ付ス許ヲ不許ヲも假令ハ之ある痢病ものの病
人ものも五人の医者の方へ聞よ五人共ヨリ皆皆ヲ間違ひ許と不
許ものの品甚相違有るものの是ハ病家ものハ疑ひて医者の文盲
ものて食性を不識ゆへのものとものもの誹謗ものも全く様許り
でなく面面の効用ハ宜きを常常住異ものの許てことあり夫
を初心の醫生ものて本草又ハ其外書籍のものを取ものて取さ
るを千万ものの霄壤の相違出て来るものの多くハ学文の外の本
草ものの様の處ヲ能能心を附て思案ものを化こものの权又唐山
の書ものと一部全く用ものの食物の書ものの彼是と選可用か

り自今ハ一書を付ものて可用童蒙ハ用ひ来る日用食性ハ今ハ用
ひて少少相違ものの形ものの抄略ものものの食物備考閲甫食物
本草養懐食鏡ものの類數多あり近世物産の学盛ものて行ものて
漢物和物ものの別ものものて委曲に成ものて　和書中ものて本朝食鑑
大和本草ものの宜ものの唐土の食物の書ものて東垣食物本草日用
本草李時珍食物本草ものの取用ものて凡食物本草と號ものの諸家
の本草甚多て近来の珍奇の品味ハ至ものては晩李の医書又ハ府
志縣志の屬ものの考見ものて
凡薬の引経報使升降浮沈先天後天又ハ五行配當其外様様の邪

說ゆゑ降るゆゑ二安語ハ世俗の道中附のごとし一笑
ゆゑ[illegible]む要[illegible]なり此樣なる說ハ古本草なりとハ
決して無之ことなり張潔古と云者初而仕出して東垣丹溪なと
元金の医流り唱初大きに後世を迷して未学に害を殘せる
なりとかれも此て宋の末路宗奭と云ふの本草衍義を作ま
り其時ハ邪說ともに附會なりなれ又自己見識をてるとてハ
用ゐ用ゐらぬ所書なり只只本草の学ハ藥の氣味と性とを考療
體を廣く貫暗記して是を病用に施して切を取なり餘事ハ略
り

藥性ハ醫家の第一の先務なり藥性を学ぶにハ本草を本とす
なり凡医学の本根ハ本草なり上古神農氏民生の疾病を患て百
草を嘗て性味を知分て於是て本草始て出今医者本草を学ひ
藥性に不達して治療に通達する事不能なりけて又本草諸家
ありて種種說說あり古今の學者區區の臆說ともなり神農本草経
と云ハ其創草にて畢竟ハ陶弘景ゝ名医別録を著してなると起ま
り是を本草の根元と可心得なり夫より代代諸家の本草出来れ
る諸家增益して廣く成来りなを別而宋の唐慎微ハ證類本草に
至て集て大成せり世擧て是を用ひきなまり然ト明に至りて本草

時珍出て又其證類に増補して本草綱目を著自云天下の大成大
全を集めたりと成り博あるにて博なれども餘り廣博衆多
に過るゆえ其繁をつゝしむ簡に從ひて文章の成語を節略
し損益の通一かゝる所もあり又古書を引用る所自己の臆
見を以て改削して是又不通の誤路なるべき所も有り其餘あ
やまりあり不可枚挙其子細を不知人は以為神農以下の
一人なりと為を以て是を見まゝに信じかゝる書
なれども世界一同に尊崇きたまふ夫も斷り成り難譯に證類
本草に和板よりも遠之世間拂底なれ見る人希なり綱目にあ

ゆる板本有にゆえて求易きかゝる綱目をすてゝ他に求むべき
本草なけれ共にあり先初成るものは綱目にもとづかひて後に
自分の發明出たる時は商量して見識をひらき用ゆる所の先
修に從ふと云事医の肝要なり且古本草を云て諸家の説駁き
形り序例の中に審なり綱目以後の近世の本草は皆時珍の糟
粕未書なり用ゆる人なれば能能考見るべし面面学び熟すれば
なるべし自分の見識に乏る者は證類本草の和板なれば
嘆ずるに足ることはなり本草序例と云は全く證類の中の序例の
事なり綱目の序例と云は時珍編次の仕直なる間好もあり

まつ医たるものの證類の序例を讀まんハ不可有古人の其意有
れハ、さて本草序例として別に板行ふてあり熟賢まゞ序例と
意有れハ證類全篇を開板すべきに其さたなきハ如何なる文
言ゆゑの事ぞや
藥を製するに古ハ刀をもちて只ひたすら喰切て細にせり因て
是を吸咀と云て云ふ後世ハ刻て碁子ほどにするを
形ちも云て有り製法もまた違ひ有り總て書面にこそ
かゝり心得居ていハ相違有事形ち前にも云たるゝ本草の製法皆
皆掘出して生りる藥の事ゆゑ今此邪ていハ乾藥を用ゆる故
に問に抄略有事ゆゑ能能心を付て相違なき樣に出るべきを
形ち藥性の吟味人情の義に付品品事多きゆゑ陳嘉謨本草
に悉言書るゝ
本草備要に藥性のさたを論ずる其内に理味義味と云たるを論
ずる附托の說て埒を付ること形ち古の法ハ上部の疾ハ
食前に服すと云ふ之ハ湯に注認庵其說を謗り雜說を立て論せ
り地黃丸用ゆるに一時過ぎハ大根を少しも食して害ありと
云俗說ゆゑ医書に出る事てハなきも世俗に仕来て習
ふゆゑ不得已形ちこそ先其通りにそうふすると外の事なき所

本草の学金元の世より大きに變して張潔古の説より別して様
様の偏を作り毒をかかして今に至りて古本草の道を失へり方
如川々本草草方此序には王好古より古本草の道を失ひしと
云へり

脈診第三

診脈のことハ醫家の大乗なり大体の修行ハ脈理に通達を
図ること成難き形如何とかはは書籍の上ハ勿論のことなり以心傳
心して面命口受なれも其模様鹽梅すへからさるなり只自

習得し獨大悟と行はかかる事かに免角達をかまてハ隨分修行
せすんハ成ぬ夫れ古ハ古くてハならぬ方へ先
古書古経の中の脈を論ずるなる書を見て脈の形容をとる者自
然かはるなる今の世治療をする医者ハ中ふとしかる脈ハ古人
とかくもとまるとして置なる中中今時のことの何して学ひ
得るかを我七十年来日日夜夜病人を取扱ひしに脈のことをも
らくして更ふ知かたきものかなる古人と捨脈取症かなと云へり
又一向に脈を不論して捨なる書も有形然るも其人を療治を
ハ能こそ存なる又許胤宗を云ハ是なれも云るなと有脈の

事ハ脈ヨリテ明あかるしとも云云ヲまたは脈ハ無用のたとへ
ヲ云人あり是ハ持ヲ知ルのミにして脈ヲ不足取
いんと云ふ今脈ヲ捨て療治のなるべきとれまたはかき形
古人の医書に脈ヲ不論と云ハ證治要訣の戴元禮云ハ庸常
の医ふあらん定て見識なりしのみにて漫に議かゝ盟
問聞切の四診ハ切脈にて切の字ハ意味深し必附て見
るべ脈のさと言葉ハも述かゝし方策のうへに論しとされ
き調ふあり或人隨分無病にして平脈甚數脈にて七八動位ハ然
ハ目寒凌暑に熱發ヲ陽ヲ或ハ其外の病ハてヲ兎角不快

の時ハ却て遲脈ヨリ四五動ヲはまた遲の方ハ成るなり又
或人夏間の脈ハ然ハ小ハにても大ヲ病有ハ其儘本部にう
ける形人様の類さたあて世上の人ハいう程もあるべ扨又
高陽生ヲ脈決是亦可用なも古人ハと謂て信者もなれも見
て不甚ハ細ハ偽決と云てさかるとなれも王叔和と名題ヲ號
て實は高陽生ヲ作ハ其書歌訣ハに童蒙の記誦甚便りな
ヲ其中七表八裏九道の名目ヲ立て二十四種に編ヲ是ハ
は難もあるさるハ又部位ハ付ても少し説有りそれ先
先用ハ若ハからさるなり東垣丹溪等ハ皆從用なり

扨又部位の大て品品の説あり別て明朝よりして様様の理屈
とも出来して童蒙の惑ふくかりの嘆ありて先哲よりの通り
脈決の部位を可用とされども従来する所あるなり其上ハ古書ハ
て正せはたりかりなりこれ其餘諸説等ハ明朝諸医の脈位
斷して不可用甚治療ハ医学ハ害有り元の戴同甫ハ脈決
利誤を著る意趣なりなりなり参看すして扨又色診の法あ
り病人の顔色を相考疾病并小生死を知るを形り是則聖人
ものなり又尺膚の診と云ふ有り手の尺澤より診するなり脈
要精微論の尺内の兩傍と云はれ尺澤の診法を論せり後世ハ

寸口の部位より分て見ることは甚疑ふなり又古人も脈の細
領ハ浮沉遅數の四脈ハ不過といへり是肝要の論なり治術ハ
一に成程至極なるなり又小兒の脈三歳比迄ハ虎口三関
の診を以てしかりことなりなり或ハ面部色診をしかりなり
形り又俗ハ糸脈と云ふ貴族の婦女直ハ膚を医人ハ按せ
ものを故ハ脈の動を糸代持て結構惟慕ハ外りてしかりなり
ものなりなり後漢の郭玉と云名
医惟慕の外ハ左手ハ男脈右手ハ女脈なりと明解なること
く明医ハ通達なりなり糸脈なり通達なる医ハ成程なり取志

大抵の揣摩にて脈の義八通りあるなり古人
を云う次は又腹診なり古人有るこなかと一なる診據医書少し
なりなれども今治術の上ふ其利益有こと形る是又腹にて様様
の異あるなり口腹を按ずるなりてはすまぬなり是又揣摩
數年の功者あれば成ぬなり腹診の事難絶よ據なきあ
らば世上にて切紙傳授なる腹診と云は銭を鉤手術なり反閉の
脈と云こと有り寸口の本部へ脈ありて そもいて後の方へ
閉なりて打なり病あるまは本部へ戻りて打と云なり病愈れば又
後の反閉の場へ出なり是を反閉と云形る此人いきわ

吉兆有りこのなりと云う兩手ともに反閉なる人あり片方反閉と
云い先は多くあるなり男女共に有こと なり陰陽の脈
なる云あり足跌の動脈なり足跌の脈と云は小児の脈かよ
び産婦の離経七脈と云さる品品の説なり小児は都て幼稚な
て小手の一定なりかなれなる虎口三閉なて指の紋理なと云て見
る形なり又解盧の動脈なりても診六七歳以上は手小ても肉付餘程
大きく成り本部の脈も診せらるなり長崎へ唐人医者と云
この未まるなり崎人の物かるに脈を見ず一齊に兩手を揃
て一度に診らるなり日本人の様に左右兩度に見ぬと云り

脈臺を置て其上に案端に氣息を揃て見るべしかのごとく形
此 形の様子持てかゝるは七分あり此方にても下位の人なり
勝臺にて見るべき中葉職人畫図の圖を見るべし時医病家へいたり
診察する互に對し腰を掛りかけ卓上に病手をのせ片片此手を
見る模様あり左右前後と次第なかれ一度に見るべしと形
し
大素脈云ふ是ハ脈の名義實子かたり難経なと尤吉
凶を知ることあれども大素は臣下の脈を見て君の疾を識り妻
の脈を見て夫の病を知ることなり遠邪説取ふべからず難経の吉凶

とは死生の吉凶を讀べきなり云ふ大素とハ古の脈流の名
號と見へたり後世なれは依托して品品の妄説を言出せるなり
用ゆる事なかれ總して脈学なと重きことはなきなり故に唐の
明医許胤宗の言に脈の事幽玄にして明あかしと云ふ古明聖
すら左のごとく云ふは況や後世の末学なりしを心許なし学
ひ始て上に重き所を議論せり学て初りしなり
自暴自棄初学の者ハ平日に無病の者に平脈を取りて居る
を又一修行なり元有病の脈ハ猶更精出し人數脈數を多診ずる
中に自然と融通する場出来るなり形面命口受以心傳心の意

味有之なり今の世俗中に脈をよく知り病を引出すとなさんとて
ともがらの輩あり神子のおろしに云もなり是全く虚言なり不可
従只自然と病の上に脈診塩梅あるべきなり脈の名目脈訣に
所謂七表八裏九道と云ふこと有り是ぞ廿四脈と云なり傷寒論の脈
の名目は格別なり後世脈の綱領として浮沈遅数と名を四脈と云
朱彦脩滑壽が輩の出せし所なり尤肝要なることなり其外の諸
の脈の名目をよくおぼへて居て脈の形容をよく覚て手に應じ
意に求むべし
凡脈のまなびは先難経を本とすべし初学の時より先先名目を覚

又脈に部位と云ことあり脈を診する所の場なり両手の動脈
を察するなり凡人身十二経皆皆動脈あり古は人迎氣口趺陽太
谿とて諸脈をも診して病を察せり左右の手の動脈ばかりを以
て見ることにはあらず難経一の難に其言を難せり十二経皆動脈
ありて獨寸口の脈を取て以て死生を決せることはいかにと難ぜり其診
するにも男は左りの手を先に診し女は右の手を先に診す是又
法度なり其寸口を持取て五藏の死生を決する所なれば難経に弁
せり故に難経によりて是を求むべし且脈の部位の事後世甚説
ありて紛紜紛紜として誰か帰一の弁あらんや和人にても脈の書

を著わすものなりて明医のものの品目部位の異を雜せり然と
も後世の邪説共多くして後人を迷惑す一切不可用尤脈の事
素難より始り甲乙傷寒金匱抔古医とする起たる古代書に從て王叔
和集めて脈経をなせるより古来より脈の部位の事ハ古先の医者
も皆皆難経を從の用のあり高陽生脈決を著て歌
決を作りて日左心小腸肝膽右肺大腸脾胃命門とあり宋元初
明まても名医とも是を從の用ゐることを見へて面部位の取沙汰
の部位のことハ明末の医者とも言出せること也高陽生脈
決を作まる自分の作と云ハ何のことを形容に叙和號したる
ゆへ偽決なりと云誹を得るゆ畢竟托名の説形り
脈小胃の氣の傳受と云ことを和医ハ切紙小あるなり唐より是を記
たるもの去れども老医の數年取覚へるうつにきれなるを
口受とする為にもの或ハ云脈の艶のことをいふ形ること

方藥第四

方ハ做ものと云て凡方小單方あると成方ありて總して藥品一味よ
て病を療する是を單方といふ又藥品數種を集めて疾を治
する是を成方と云なり其單方成方ともに皆古人の組立用ひ来
も原藥方これを總て古方と云形り其成方ハ形りて何何と方

名を付るなり單方ハ方名をハかきなり然るに一味配剤と云
ハ別のものなれり扨其古方某某の病を治するとゝろを言論し
たる言を方論と云なり其論と方と共集編したる書物をハ
方書と云古き方書をハ古方書と云後世出来る方書を新方書
と云漢の張仲景の方書を方祖とするこゝろハ成方を始て組立
て名付たる多く出たる書ゆへ是を元祖とし依之ものこ
夫より千金外臺を始とし歴代の医家各経効傳来遺し覚る方
又ハ自分ハ組立ものも或ハ世上名高き方他傳の方貴藥の
名方まて集て方書を著せり尤靈樞にも方を出せりとゝろ

疑ありきにあらず或ハ前漢書にも方名見へたり其成方組立
るハ君臣佐使又ハ七方十剤なとゝて法式あるこゝろ中中
後世の医者我意に任せみるとて立方すること有ハ近世庸
愚の輩後明立方なと脇腹なり他僻なるこゝろ必必可慎こと
形なり今の世にたとへていハ只古人組立置たる所の経験代名方
を用ひて今日の上に治療をなすこゝろなり是を古方ハ手ろこゝ
なり然るに世代異なり人の性情稟賦も又異なり殊に季世ハ各
別に人性を薄弱なりて古をちがひ有毒の藥を用ることなり
て其心得なりてハ古方とやとても是非の差別なく漫に用ひん

と弱せは大き成る僻かり凡古方を用ゆるふも大きに變通有こ
とかり羅無も古方ハ以て今病を治するハ舊屋を壞して新屋
を建るかことく夏ハ匠師の手を経ずんハ成事かりと
云ふことかり羅氏ハ古方を不用して新方を立る流義の医者あれ
ハ意味合ハ違ひかれり又格致ハ吾仲景の法ハ從ふとも未全仲
景の方を不用と云ふ是は丹溪古方嫌ひて自立の方を尊ふ流義
也此説用ゆるハ足らぎるかり病性に臨て古方に中一二味の
加減差略ありこれも所詮ことを漫ハ庸手の輩ハ為ぬたにあ
らんハ是ハ權變の術かり能方意に通達する人ハかれ
ハせ

ぬことかり加減をも古人の加減かりに法度ハ
為しハ傷寒門の藥方ハ傷寒の病人ハかり用ゆると心得て
居るも柱ハ膠して瑟を鼓することかりに同傷寒の
方とても或ハ血氣を治するハも用ひ又痰を治するハと用ゆさ
かりも青龍湯五苓散白虎湯かりに至極の名方かりて變通の
奇妙ハ中かりかなり作云夫ハ医の上手かりて成りかゆる
手術形ハ方かりハ名手とハ謂ぬなり是全權變にあることか
り成方組立ハ後世ハ皆皆理学議論して組立ハ故ハ古
市と違ひて要妙ハ此かり總して古ハ方を組立る時ハ當て本

初より理窟を以て組立たるものゝ決て無之候ハ假令ハ某の病を患るものゝ病狀何かゝ〳〵をもて工案を運して為に一味一味組立自然より一方となり是を云ふ成る形是を用ゆる時ハ功驗を得るなり時ハ則此方を重て又其病狀を出合して用ひ貴来りてみるつゝ名方ハ名方となり形ハ古人の組立てる方ハ悪く名方となりハ僻事なり故ハ古方書ハ中も功驗の名方ハ世世諸名医信用し来る方ハ希なるものなれり故ハ古方書の方下の論と云ふハ甚肝要なるものなり治術の志あるものハ此場に心見る附孫べからぬこと形り方下の論と云ハ此方ハ某某の病症を治する何何何等の證を治すと有て何故に其病症を能治するかと云理窟ハ〳〵を形るものなり故ハ今の病に有て變通一出入し用ゆるなり方下の論に此藥陰陽虛實寒熱を不問并に皆治する有ハ是の成方の妙と云ふ所なり然に後世理学の医者其議り笑て一切に廢絶せるハ嘆しきなり總して医家の要妙と云ふ代合點せるハ医道と云ものハ一生會得なるかゝるなり後世の方書ハ大形五運六氣なんとを附會依托して當前口あるるの好樣に鹽梅して理窟 製造して云盡す故に妙の神のと云ふハ〳〵どろ〳〵消て行

へる形易にも陰陽不測是を神とせる妙入神かと云所
の本意を取失ひ又なり右のこと〳〵附托なる医書伝て治
術を施すを愚の至り形故小後世の方書及邪説の医書
一切は見るに堪さる形作を初心の者初入す古方書も
見て却而害小なり〳〵又取廻しあるれば彼小立ぬか
り明朝すても古方書の模様は仕る新方書も多くは能
能見て段段本源頭小流回を考れば古方書新方書は可見こと
大略辨書の中に記す又方書も品あり見様も子細色色にする
なる形近世は方書の大部なるを信仰する風義なるを来

まる其上晩近の書は偽贋未する無益の書を以てする如す様な
る書形珍書奇書と云てあり〳〵尊信してかてこと〳〵
れ近来の悪弊なり也也古方書は日日に亡ひて新奇なる書の
と行なるに成る来まる總て薬品薬方を遣ふのも古来は
用来なるは形〳〵いこれなるも〳〵名手段の医者は多〳〵
不遣なる形然は准縄の医統の綱目は玄珠なんと云医書莫
大なる高なること成る尤古方書は千金外臺聖恵總録か
ら云大部書も有れども方〳〵なるして無益の義論はな
れり作云小部の書は肝要なるかを集る程なきは多く形形

大部多政亡羊ゆて左とハ役ふたゝぬとものゝ大部ハ後見ろ人
選ちて見るゝき形ゝ小部の書ふ至ゝて治術の意味をよく
論ゝ奇方ふも能選ゝ出ゝ〳〵ゝ書有ゝとゝ此等をゝて信用ゝて
居ゝ又顔門の方書ゝ云ふ是一病ゝ妙を得ゝるゝゝを論
ゝなゝとゝ尤此屬ハ要妙なゝて精ゝ記ものなり又 日本
ゝて組立ゝる方ゝ和方ゝゝ醫家ふも各家ふゝ傳ふる所
の名高き名方ゝも多ゝ赤井の龍王湯山田の振藥桑山小粒西大
寺の豊心丹小田原外郎武田の保童圓其餘家家の秘方名方医
延喜式の人ゝふも方名多ゝ見ゝ〳〵ゝ和医の組立ゝる方もあれ

ゝも恐らくハ上古古方書の唐土ゝ渡りなる間ゝ其書ハ彼の
和俗の悪習ゝて神秘ゝ號ゝて秘書ゝて過半断絶ゝ居ゝれ
ゝゝ其中ゝ出ゝる古方もあるゝあるゝて和方ゝ自然ゝ多ゝ立
やらんゝ難ゝ有ゝ其内の甚験ゝ経ゝる方一二ゝ世上ゝ流布し
て縉紳又ハ各士の家ゝ入口ふ鱠炙ゝて残りなゝふゝ不可知ゝ
信用ゝ〳〵きれゝ各傳ゝて心あゝ居ゝゝ〳〵ゝ和人組立
ゝる方なゝゝも和藥ゝ和人ゝ用ゝゝゆ〳〵ゝゝ尤ゝ志ゝる居ゝこと
形ゝ又和藥の入ゝる一方ふ甚妙藥妙方ゝも多ゝ必可用ゝ又單
方ふて病ゝ治ゝ居ゝも妙藥ゝ云ゝれゝを用ゆる醫者ゝ妙藥医者

とて笑ひ謗まても是ハ無理なり姉葉医者のことく唐土にて
ハ草葉とも草醫とも云ふり姉葉とはなるねハ成らぬことも有
なり又三方ハ自然の方なり是ハ揣摩の功を経て變通の道に達
せ様ハ成らぬなり又一味配剤と云ふこと有り唐土の医者ハ
此流なり症に對し一味一味君臣佐使の意を擬して當座三方
なり孫一奎なとも有り又王宇泰醫鏡ハ全くの流義なり
和醫も上代和丹の兩流と云て此の人ハ名醫なり夫より代代と
なりて中世甲斐の德本なる云あり極葉無量藏と云書を
著せり今世にあるなり寶丹王丹と云二方を用ひて療治せり總

して攻撃の藥ありなくして當時の虚人ハ用ひなくなり其外浴
氏流なり云婦人医ハ中條流とてあり皆皆其流義の書物なり
板本なりなを又書本あとあるなり外科金瘡一傳切紙傳受和流
の外科の書物藥品姉葉和藥の遣ひ覚て奇功をあらはすなり
夫を考見るに医の書と云ても大形ハ古方書の中より出くる
藥品も相見ゆるなり
仲景なりの時の方ハ悉く名方なりても有名なりても後世に為の
段段用ひ来る時ハ奇功の有無に依て自然と無名の方と成りぬ
尚其後の方なりても此理なり晩近の方ハ理を以て組立て

夫初より名言なく無之ものは凡言ならざるものは成方ハ組立て
ハ一味一味の零なる功能のみなれハ無之ゆへ葉合して神妙
なること人智の測かるべき功あるを名方と云ふ後世より組立
る方ハ能きく方もなきく有なり夫をは從て可用なり後世や
くさくの形なる方書ハ今日ハ用ひて能きく方とあるべきなれ
も其書能き書ものハ夫ハ葉の要妙なるゆへ陳皮
紫蘇二味あるはなきけの効ハなるゆへ後世の方ハ大形
古ハ祖方なりて皆煎直して茶切なるべしこれ功を高なり不
可從

合剤煎煉ハ用ゆる所の升合ハ事是ハ甚六ケ敷なるゆへ仕方に
よりて又甚容易なるものあり分量のなるハ斗量衡にて天下國
家の経済ハ懸こゝにして先ハ大事なるべし中中醫家の論盡
し極ひなることにあらざれども自然と醫家の斗量あり古来よ
り中中の變なる故ハ忘れなるまゝ分量なるも大か
いはこれらなるべしも悪ハ論じなるまゝなるの形是ハ
子細あるべて別に記置べし此丸略を總して葉も今ハ撮合して目
分量にて合せるなり煉丹ハ別てなの目分量にて云て肝要の
事なり口傳なり煉丹丸散の屬ハ平素よりなるべし調合致し置

て用ゆるを韓退之も牛溲馬勃敗鼓皮骨を待て無遺医師の良と
云ふを總しての薬品も心懸専要也
世人好て持薬と云ふを用ゆる形り持病宿疾のある人これを
愈人として用ゆる薬ハ若れも只地黄丸一粒金丹ゆゑ
屬も補陰の助となるゆゑ壮陽の薬とて温燥の剤を多
服して作功を専ら夫頼よ色慾過度して終ハ命を殞すものの
ゆゑ又ハ春薬媚薬とて陰器ゆ附て婦女の情慾をうゝゲ術あり誤
て陰器を損して後ハ下疳瘡ゆとに成ることもあり天下此此
として皆是ゆ愚なるかゆ病家へ今様の筋一切ハ勧むるら

ざれ醫者たる身ハ猶更慎ミ専ゆ
右ハ論ずる方書ハ元医家の重ずる所ハ薬方ゆ薬方を
ハ尊信することゆゑ宋の時甚ゆ盛なり先第一宋の帝王
薬局を立て天下の名医に詔して古方新方共ゆ名高き名方効方を
集て調合して下民の為ゆ賣ゆて民病をすくひたまふ故
此薬方名方集ゆと多き故ゆ宋朝ゆ名医の多出て名方も多出
ゆる世ハ古来ゆなき素人ゆ至るまでも薬方を好て集ゆるゆ
り是ゆ一時のゆやをとて多ゆ仮ゆ板又宋朝の醫ゆ著ゆる書
ハ大形方ゆ以て名付ゆる形り是古ゆ醫の要ゆ所畢竟論

まゝあらて獨薬方ゆゑあるこゝを考ふるなり假令ハ三因方易簡方和劑方濟生方本事方梅師方の其餘甚多して不可枚挙其書是病論もあれども全理屈なくゆゑのまゝに病症のみを論したる形り中にも方を重とする故小右代こゝろ〻あいあるの又今賣藥と成製の煉丹丸散をさうゝ〻るの多くもあり又家方と稱するもの皆店を出して藥屋よりの如何樣も製法等品味の吟味さらゝを心元なしと云人もあれども下民の利藥ゆゑなるさて利強てさからはぬこゝろをすゝめたるもあり歐陽文忠公咳嗽を患ひ三文錢の藥を

もて通る者なり夫を求て服して切を得ることあり又宋高宗かて貴ゝ痢病を患ひくまゝ百方驗の時ゆ藥肆店ゆうる痢の藥を用ひなまして愈ることを有りとるは賣藥にもあかとる所ゆうゝ時ゆゆう病人ゆ利あるとかれハさして醫家に害にあらぬこと形り其まゝみてはしに置かゆるこゝろなり

藏府第五

五臟六腑と云ものハ人身中ゆあるて各自ゆ用を分れとなり凡十二經絡の論ハ甚難 歴歴として述せり古の明醫人の内量を回視して論置ゆ今時の人ハ是を守て確乎として替さ

う〳〵然よ後世彼理学我醫道とも論來り品品理窟をつけ先天
後天かと云ちらして動〳〵流義の醫者不圖發行し來る夫
故古聖賢を疑ひ理窟りて人身を論ずんとして色色妄誕附會の
言起て後世を誤るなり尤甚しけふとは古経に塗して蝸を加ふ
様かと朱彦脩も云り彼後世の妄誕に先口ちるうらうきに一
盃に其手を喰かり能合點するとかたんとうかはあ書ものなる
を先試に一盃にくらても見るあるべき作云諺に云毒の試かり宋
の陳無擇と云るものに餘程頭角を擡るる醫者形り夫〻先何とう
ちたくあるや徐道と云るもの妄誕を信じて三焦の形あると

云ふるを唱創り夫より一大虚ふ吹または十大實ふ吹の理よて從
て和ずるを以て甚多是古聖人をうたがて我智ふらはされ
理窟たてを云ふかり起れり後世猶猶大に妄説附會取ふた
らに總て無擇と云るものに方藥よも者なる者かれも僻見
の悪者まて運氣の説をも初て方書の中へかと入るに些者な
り右二件の罪まことに莫大なる科なるを依之是を見れに三
因の書も又見さあ十ふこと出来る右の悪藥のたとるを起り
て今時の人も獄屋に行て死罪の人の口を解脯分をして見て我
こそ人比五内を洞〻に見あるかと そて聖人の様ふ云るものに

て是ハ大なる僻ことゝ成り片腹あつ〻て形ち如何とあれハ
醫家の五臓を論ずるハ生人の事ゆへ死人の藏府をいふ事あり
ハたゞれハたゞ見るゝとも無益の事ゆへ取揚ることにならず
すなわち人ハ其形象ハ少少似ることを色合ハ變ずる成下形象
を死てハ氣力形き力人起脹したる所もなく冷もとゝ成ることれ
を色合を左の通りなる色したなり色と形も變ずしてもとも神栄
ハ去て盡〻夫を見賞へ是ハ治療の用に立ざるや愚成ら
形聖人ハ生て運動する機活の用を洞視して論置たる所夫
故生て居人の藏府をあらされハ醫者の用ハ立ぬ故鳶

射狼の食餌ハ宜しかるべし又紅毛人先年傳来せる申て彼
の國ハ圖法師の傳を同僚の所ゟ見る人の身を湯ゟ焼て
カ〻て薄剥て経絡の行度を考るゟ聞ゟ是亦死人の経
絡無益の事ゆへ真國ゟて有用の書も未可知但右ハ
書ハ實説なるや否ハ之を知ぬ尤彼國ハ外科の重成國なれハ
其用ハ可ゟ紅毛人ゟ聞たらハ知るゝ わゝと可有ゟ
ら〻ゟ〻ゟ〻ゟ労して功の化ゟハすて置ゟ
ゟ
三焦心包命門等のゟを後世の醫者喝喝ゟて數百人口口に

彼の理窟を云て妄説を論ぜり畢竟醫者の道ふくるからぬ故
かゝたりて八十程の愚かることハ有まじ況古医明
達の人ハ三焦の形あると云たる人ハ古今一人も非し素問難経
ハ歴歴として無形の言有之かゝ辨を不待可知ゝ三焦心包ハ
ゝりに名あるとて形かゝると云云形かゝると有るものをもて形有と
云ることいかゝかゝても無理なることゝ学文の筋あ況也人
形かゝて算用ハ合ぬこと有故かゝるに形なきたるハお
のゝ況て形なきを形ありと云云形かゝると有と
書れり先理ハ有とゝ　今なの上ハ近きなる人ハ風

ハ大ハ屬易ハ風の義あるとて火かゝるものの形ゝるとも名
のゝかゝて形を見ゝ人かゝ物ハ付て形を成かゝ天地ハ充山川草
木火に入り水ハ入り不至て云所なし其就ゝ以て則容をか
すゝ文選かゝ風賦あるとて風のこゝを能云盡せり金匱ハ云て
人ハ風氣ハ因て生ゝ凡人生の有ハ皆風氣ハ因ると有り風気能
萬物を生す又ゝ萬物を害すゝ古人の言ハ風ハ百病長と
いつを人身ハ入て様様の病をかゝるとゝ三焦も全ゝ風氣と
見て相違ハかゝ有ゝ古ゝれハ除道ハ大かゝ風の形をも見ゝる
風ハ物ハ入ると形代かゝと云ゝ心包

終に全く真通り的の命門と云ハ右腎の替名を加へて居るハ
より是亦後世品品の説なれ必不可信用扨又君火相火の事是亦
運氣家の説なれ本家の本説に非す古素問よハ是の代事なれ後
世玉冰の次註より運氣を附會せしを起り取不足事多し今の
素問を用ゆる心ならハ君相二火の説用ひぬハ難成右件は義と
も後世影響説説紛紛なれ後世を惑ハ邪説日日に出て闢
之鄭聲なるのみなれ古人ハ何なれ云のなるなれ問は古人
の智恵今人より減なるなれハ然し今人の智古人に勝るなれ
もの畢竟学文の仕方見るけの見積なるなれ始まれ古人ハ

堅く古聖賢の定め置くる儀を堅守りて疑ひの眞實に守りて
不移ゆ（なり）後世よにやくやくと云ハ右なるのこなれも此に
云ハさるを用ゆれハ先て不合さるを云ハこなれ違なるを
まれいやかるて一部始終玉聯環の端に形きるつ〻ごとかか
もすまぬと云こなれ今〻理窟を附托して甚し様になる
ごとの是後世の俗学の是大段道を見失のなれ又古経古方
書の塩梅をならぬを起れり古書と云なるのハ篇次も調ひ論
をなれらつ面あるぶるの形に其不合なれ古書の尊難有事
なれ有り医経も秦火ふれ（なれ）と云なれ慥なるのなれまで

焚すること數十歳の下に存してあれハ錯簡衍文多くハまぬかれ
ま程なハのきこそ奇特なれ華佗が獄屋より如何様の好大切の醫
書なりきたるを焚くなる書ハ志ハ也なり打續兵革の患あり此時
より古經とびすして何をか待ん云ふ不及ことなり東坡が難經
乃ことを佛書の跋より論せるハ古經のことを不呑込ハなり其
古書を以て附托理屈でやうとする形ち夫故より多言を貴して
むづかしを山れことに論したる書多く今の方簡を以て古人
の意味をもかるゝ蠡まて海を測るあり同し故より古書を讀し鹽
梅を知らされハ百世と云ても可知將の明ぬ学文ハて治術の手

段へハ行ぬこと形ち畢竟何のたゝり古書のことは涙めき
かゝ故より理屈附托して見れハ今日ハ先聞へ安きゆへに人人
後世の理屈ハ陥る形ち彦脩が書ハ様ハて古書をハ可見な
るかゝ其可通をつゝじ通ずるあらさるを通ずと云ふ是ハ
まゝ彦脩ゆへにこゝ知言なる哉この意をかゝて古經を見れ
ハ治術より益ある形ち書物と云ふの全篇用ハ立物ても形し一句
一言ハても治療より用あることを能能暗誦すべしたゝ外利益
になること形ち藏府傳輸等のたゝ先古人の云置る說より隨ひ
てさて自分の自得發明をこゝあらハ著書ハてもすべ記な

を要訣と飲食先入肝と説あり此等のたぐひ何を據として云へる
しや王字泰戴元禮ハ何れ如何の譯あるとて此言を述べる成や
恐らくハいとゝ心なきを云へり不佞小史に誤て原禮の謬
を云へるは後悔脳を噬かり未訂の書ひやすく多く其藏府盛穀
の論も難経と隨分違へ後世の説を用ひるらしく左氏も云人心
不同如其面と云へり面さへ各々不同なるを況や五藏六府百
節九竅おいてをや違ふまじきなり反閉の脈も
さるなれ共知るべし腹内ハ反閉の経絡あるべきや又況や
人身と肥瘦ハ何と一概に論すべきにあらず人〻古人の法ハ法度に云

置變と云よいへるとハ不測成るものなれども變ハ規矩ハ
決してならぬことなり今時の生学者ともわるまじと経絡俞
穴ハ人の發明をもて為すべき理窟もて仕置べきなれ迂遠の輩ハ
ものなり慎べきことなり

鍼灸第六

上世ハ病を治するに鍼と灸とのみにて煎湯と云事ハなか
きなり後と薬方始まる中世已来今の世ハ至りてハ三法共と何
もて病と用ひ然と當世の醫者鍼嫌ひと灸嫌ひと云ものハ
難心得事なり甚しき僻事なり自分に灸をすゑ鍼をさるなれハ

其性の好悪よりあせて嫌ふ事も有まじき物なれども夫ハ止
事を不得ものゝ夫を一概に病人にきらはせ云ハ是鍼すまじき病
人ゝ鍼を立灸を用ひ病人ゝ灸をしてもよろしき嫌
ふこゝろ有るべきれ是ハ熱とも見まがへて冷ものを吹と云
論ハ能あるべき有まじきたぐひ
凡人身鍼灸俞穴三百六十餘あり其中禁鍼禁灸を除ても尚夥
しきこゝろ有べし醫書病論ハ其鍼灸俞穴の功應を銘銘ゝ數多
云立て有之ども又其様ハ聞ものゝ有べし是ハ平生不口口す
るゆゑ所ゝ有所ゝ事ゝ有ゝ遠き穴所を求尋出して立てゝ云

ゝゝすれハ僻異ゝて奇を好むゝて上手段の者ハ非所為且三
百六十餘穴皆皆要穴ハあらぬ要穴ゝて肝要の能きゝ経験の所
三百六十の内ゝても三十五六ケ所の穴ゝ外ハ無之ゝて
故ゝ入門ゝて要穴を出せゝ又ハ明堂灸経ゝ有て要穴奇穴を
かゝるを論せゝ是亦後世の説ハ三百六十餘穴皆要用の様ゝ云
ハゝゝゝ説ゝ扨又何是穴ゝ云ゝ馬元臺天應穴ゝ名
ゝゝ是ハ第一ゝ心得ハあらぬことゝ前ゝも云ゝ通ゝ凡人
身の不同こと其面のゝゝ人人にて違ゝて況や経絡
俞穴又相違ゝ不可有故ゝ穴を取ゝ總ゝ何是の心得かけ

も、間違出来るものなり正真の書物の通りみてゝ一束
捕よりは月〳〵て居てあらぬこともあるべし下下に至りては先年
し會津の板屋ゞ灸點又は念佛中の道心者坊主の妙灸座頭ハ坊
ゝ中風ハ灸點亦ハ乞骸の灸卸鳩の術ハ類さてハ六十六部順禮
の灸なりと云て妙灸なりし數多あるき一時もやつて歴歴閣老
貴人達も皆皆とてもやしたもの沈滅するなり是等素難不
申及十四經發揮のくらもの讀たることもなきに病を愈す
さるなり自然と仕覚る術なり是座頭ハ食らふ何の妙もな
きもの只只きてと云ハ彼阿是の穴法なり起り偏ハ灸の妙な

る哉灸の奇待と云さるべき考へ見る角なり扨又鍼医常常云こ
とあり補のうち瀉の鍼とのことすれハ云なるる其子細ハ邪氣
されハ自然と正氣補ふ道理なること云然ども正傳ハと外臺秘
要の王燾ゝ說を引て鍼ハ瀉あるて補なりと云云千載の名言なる
を此鹽梅を能能考へし補ハ鍼を頼事ハ參茂なりて直ち内景
を補ふ道具あり瀉ハ大黄牽牛ものなりていふこと ある中鍼
ハ瀉なり補ハ決してならぬとなるべしと云て鍼を止てと云こと
ハ如し盲人の鍼を言ることハ唐土よハ多きなるなり 日本ハ
てと迫世のものなりたるべし然ども習熟して ハ其眼の鍼立よ

て、却て勝れる者多し中世より出来たりしかども或云一向に補
かりとも言かたく隔することは未熟の人なりとも見事相應に
成るものなり補ハ切者に至らぬこと多し（其手除て見へ
かねるなり）扨又盲人を治するに五雜組に八人藝に云る
を見るに唐土にても盲人の鍼をさる者有ることもあり扨
又養生条を無病の人にとゆる事を羅天益の衛生寶鑑にも壁裏に柱をたてることを云り然ども
千金方に呉楚の俗頑小兒に灸する法あり是亦風俗の宜に隨て
用ひ少し證據とするに甚たるべきと思る假令ハ橋杭門

柱柵なと水中地内へ入所を火にて焼ひすべて埋れハ數年を経
ても腐ることなく新に造てハ底を焼ひ底なるを此道理なり人身
も金是に同しなる小兒ハ別而紙陽なり（蟲を生ずること多きに
因て火氣を人身に入るゝが能なり）労咳なりハ萬に一も四花に
てす（留る事も有なり）左なれハ灸なりて補とする隔て有
其故絶氣の時も一つの灸にて元氣を廻生のことなり参苓も不
及功あり是灸の妙なり鍼なりても勝まさるなるハ灸形なり常
常興僥負荷の商人なりと阿是の灸を日日すなり紅時ハ且諸病を不
生無病なりて尤も壯健甚しなる形なり其餘病を治するに功藥餌に

とも勝て速効あり阿是穴股灸とこれあり尤効あり又持鍼として
毎日毎夜鍼を立る人あり是いろ様として外見するハ宜からぬ様
にあれども畢竟ゆへ有ハ損ありとして能利を見れハ是
亦不苦癖を成ことと有れり問ふハ鍼の折迚ハ度度有こ
とあり差て害なれとも形鍼灸薬餌の病を治す功能を考
ふ天下凡病を治するの灸ハ善ふ鍼是ハ次く薬餌
又是ハ次なれり鍼の事古ハ皆打鍼の由管鍼ハ近代の旨鍼ハ
り起まるり又刺鍼捻鍼等其製ハ銀鍼金鍼鐵鍼銅鍼石鍼水
鍼火鍼玉鍼なとも有り夫ハ用ひて是ハ温石同前のも有て

畢竟ハ熨法の微意なり凡古ハ療治と云ハ鍼より起るの故ハ素
問霊枢なとに鍼灸の事を多論せり故ハ是を為て鍼経と
云なり古の鍼医ハ鍼の書鍼経ハ云ハ不及其餘明堂資生銅人等
を用ひるの後世道を失ひ埒もなきかゝ不見なて古書を取す
て新に記書をなつ成ものなれり十四経発揮を浩伯仁著て
なり海内ハ是のみを尊信して古鍼灸の書廢せり嘆し
敢こと能ハ今の学者古へ立帰り古鍼灸の法を求む(き也
導引の術是亦病を治する一術なりなれハ不可有此術近時ハ
絶へて名高き人なり能経虎伸て後漢書ハ出す華佗の法のハ

し京都ゟい按摩の上手もあるの生活ふるらぬ少（江戸めと
いこの業を法もるを法まれ惜也ヶ八段錦と云唐の仙
人ま法あり又小兒ても推合手法と云こと有中華の書ふい
て出る所

内閣文庫

鹿門先生勸醫抄上終

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan